

# *Sword of Honour* が問う戦争と個人

甲 野 恵 子

はじめに

20 世紀英国の作家 Evelyn Waugh (1903–1966) は、1939 年 12 月に将校として Royal Marines (英国海兵隊) に入隊、第二次世界大戦を戦士として、時に戦場で経験することになる。

彼は、自分の経験を書物にまとめずにはいられない作家の業を抱えている。1934 年に出版された英国領ガイアナおよびブラジルの旅の記録 *Ninety-Two Days* で、木材を見たときの大工の性を、作家と経験の関係に置きかえて次のように述べている。

Just as a carpenter, I suppose, seeing a piece of rough timber feels an inclination to plane it and square it and put it into shape, so a writer is not really content to leave any experience in the amorphous, haphazard condition in which life presents it; and putting an experience into shape means, for a writer, putting it into communicable form. . . Self-respecting writers do not ‘collect material’ for their books, or rather that they do it all the time in living their lives. One does not travel, any more than one falls in love, to collect material. (11)

作家は、人生が突きつける偶然の織りなす経験に形をあたえずにはいられず、作家にとって経験を形にするとは、執筆して伝達するということである。ここで重要なのは、執筆のために経験を求めるのではない、まず人生を生き、経験をする、というこの順序である。

彼は二十世紀の二つの世界大戦の時代を生きて、第二次大戦では身を以て戦争と関わった、関わったからにはそれを書かずにいられなかったであろうことは容易に察せられる。大戦の気配漂う *Brideshead Revisited* (1945, revised edition 1960) において戦争はまだ、舞台の背景としての存在にすぎない一方、*Sword of Honour* (revised edition 1965) では、従軍している一人の男の物語として大戦が描かれる。この作品は、最終的に *The Sword of Honour Trilogy* として知られることになるが、第一部の *Men at Arms* (1952) から *Officers and Gentlemen* (1955) を経て *Unconditional Surrender* (1961) まで、10年をかけて執筆され、1965年に著者自身の改訂による一冊本が出版された。

*Ninety-Two Days* は旅の記録であったが、*Sword of Honour* は小説である。その第三部 *Unconditional Surrender* に取り掛かった当時、Waugh は経済的にはかなり逼迫していたが、彼には小説家としての使命感があった。Selina Hastings は *Evelyn Waugh: A Biography* (1994) に、‘In April 1960, Evelyn began on the final novel in his war trilogy. There had been a number of offers for quick-to-produce non-fiction, . . . but although they were financially tempting, Evelyn turned them down’ (594) と記述して、Waugh が、経済的に魅力的な仕事であっても全て断り自分の作品に専心していたことを示す証として、1958年4月18日付けの彼の手紙を引用している。宛先は、Chapman & Hall で Waugh の作品の出版を担当していた John McDougall である。

I decided on reflection that I had only a year or two ahead in which I was capable of original work and I shouldn't waste that time in hack-work. Soon I shall have to jump at every chance of writing the history of insurance companies or prefaces to school text-books. Squire & Belloc warn us of the horrors of longevity. But meanwhile while I have any vestige of imagination left, I must write novels. (574)

*The Letters of Evelyn Waugh* を編集した Mark Amory の解説によれば、McDougall は Waugh と生涯に渡る親交があったから、自分の経済的内情を「いずれ保険会社の社史や教科書のまがきのような仕事でもなんでも、飛びつかざるを得なくなるだろう」と諧謔を交えてさらけ出し、それでも想像力のかけらでも残っている間は自分は小説を書かねばならない、などと言えたのだろう。

この McDougall 宛の手紙は、Philippe Eade による Waugh の伝記 *Evelyn Waugh: A Life Revisited* でも引用されていて、Eade は Waugh がその手紙を書いた状況について、‘Evelyn was at the time hard at work on *Unconditional Surrender* . . . His expected earnings from the book were modest, however he still had his artistic vocation to fulfill, as he explained to his publisher’ (315) と述べて、Waugh は小説家として、収入を念頭に置くことなく芸術的使命を果たそうとしていた、と評しているのである。

The *Sword of Honour* Trilogy の第三部 *Unconditional Surrender* はこのような状況下で書かれた作品である。Waugh はこの後、The Trilogy として世に出ているこの作品を一冊本に書き直したほかは、自伝の第一巻を書き上げた以外、仕事らしい仕事をしないまま、改訂版の出た 1965 年の明るる年の、復活祭の日曜日に亡くなった。*Evelyn Waugh: The Critical Heritage* を編集した Martin Stannard は、その Introduction で、‘Perhaps he felt that with this (novel) he had said everything he had wanted to say. There is an air of finality about it, of resignation’ (52) と解説している。Waugh はこの小説に自分のすべてを注ぎ込んで、すべてを出し切って世に送り出したのである。

評論家の Cyril Connolly は *Unconditional Surrender* について、1961 年 10 月 29 日付の *Sunday Times* に載った書評 (*Evelyn Waugh: The Critical Heritage* 所収) に、‘unquestionably the finest novel to have come out of the war (430) と書き、上記の Eade も ‘*Sword of Honour* ranks as one of the finest works of fiction produced by the war’ (291–92) と述べているように、*Sword of Honour* は、今次大戦を描いたもっとも優れた作品のひとつとして

の評価は定まっていると考えてよいようである。

この小論では、小説 *Sword of Honour* を、著者自身が第二次世界大戦に我が身を投ずることによって得た経験と感慨を、主人公に託して語っている物語としてまず受けとめた上で、物語の先にある Waugh における戦争、そして戦争における個人とは何かを考えたい。

## 第一章 *Sword of Honour* 以前

ここでは、*Sword of Honour* が書かれる前の二つの作品で Waugh が、戦争と主人公の関わりをどのように描いているかを見ておきたい。

三部作の第二部 *Officers and Gentlemen* (1955) と第三部 *Unconditional Surrender* (1961) が出版される間の1957年に、*The Ordeal of Gilbert Pinfold* が出版される。これは、Waugh が自分自身を戯画化して描いてみせた作品で、たいそう評判がよかった。主人公の Pinfold には、社会から一歩退いている気配がただよっている。そして、次の一節がその感をいっそう強める。‘As a soldier he had sustained, in good heart, much discomfort and some danger. Since the end of the war his life had been strictly private’ (6). この作品全体を通して、自身の戦争経験について触れられているのはここだけではなかったか。この作品の執筆と出版は、*The Trilogy* が書かれている最中であつたにもかかわらず、自分は戦争のことなど出来れば書きたくなかった（しかし経験してしまったからには、書かないで済ませることは出来ないで触れておく）、と言わないばかりの著者の思いが見えているようで、簡単には読みとばせない一節である。

はじめに触れた *Brideshead Revisited* は、日本で言う額縁小説の体裁をとっていて、プロローグとエピローグは、主人公であり語り手である Charles Ryder が将校として身を置いている第二次世界大戦中の「現在」が語られ、それに挟まれた三部が彼の回想である。プロローグのごくはじめで彼は、‘Here love had died between me and the army’ (9) とはっきり言う。更にその少し先で、その思いを説明するべく、次のように書く。

Here my last love died. There was nothing remarkable in the manner of its death. . . . as I lay in that dark hour, I was aghast to realize that something within me, long sickening, had quietly died, and felt as a husband might feel, who, in the fourth year of his marriage, suddenly knew that he had no longer any desire, or tenderness, or esteem, for a once-beloved wife. (11)

かつては自分と軍隊との間にあった愛が失われてしまった状況を、結婚生活における妻に対する愛が冷めてしまった夫になぞらえて、これに続けてさらに生々しく亀裂の入った夫婦関係を微に入り細を穿って綴っている。軍隊に対する絶望の深さを述べるのに、夫婦関係の悪化を引き合いに出すとは、いささか唐突すぎる気がしないでもない。一方語り手は、部下の Hooper がいやいやながら入隊した次第をつぎのように述べているが、それは裏を返せばそのまま自身のことにほかならないということを暗に示している。

Hooper had no illusions about the Army — or rather no special illusions distinguishable from the general, enveloping fog from which he observed the universe. He had come to it reluctantly, under compulsion, after he had made every feeble effort in his power to obtain deferment. He accepted it, he said, ‘like the measles’. Hooper was no romantic. (14)

語り手の Charles は、戦争に対して幻想を抱いていた。回想の部分で語り手は、自分が大学時代の親友 Sebastian と過ごした夢のように楽しかったヴェニスの日々を語っているが、そこに次の一節がある。‘I remember Sebastian looking up at the Colleoni statue and saying, “it’s rather sad to think that whatever happens you and I can never possibly get involved in a war”’ (98). 若い二人は、軍功を挙げたヴェニスの総司令官が騎馬像になっているような十五世紀の戦争を夢見たわけではないだろうが、戦争に何かを期

待していたかもしれない。

回想の部分も終わりに近づいて、30歳を過ぎ離婚も経験した Charles に戦争が現実として迫っている。Charles は War Office (陸軍省) に呼び出され、面接を受けリストに載せられるが、それが何のためかと言えば迫りくる ‘Emergency’ に備えてなのである。

I was summoned to the War Office, interviewed, and put on a list in case of emergency. . . lists were becoming part of our lives once more, as they had been at school. Everything was being got ready for the coming ‘Emergency’. No one in that dark office spoke the word ‘war’; it was taboo; we should be called for if there was ‘an emergency’ — not in case of strife, an act of human will; nothing so clear and simple as wrath or retribution; an emergency; something coming out of the waters, a monster with sightless face and thrashing tail thrown up from the depths. (315)

OED の ‘emergency’ の項には、‘1958 *Oxf. Mag.* 13 Mar. 373/2 The unmentionable word ‘war’ decently euphemized as ‘emergency.’ との使用例が挙げられており、‘war’ ということばを使わずにあくまでも emergency で通す役所の姿勢を描写することによって、‘war’ が Colleoni の時代とは違うことを語り手が心得ているのを示すことになった。

ただ、後ほど述べることになるが、この作品では主人公の Charles Ryder は、軍隊との間に亀裂を覚えて厭世的になっているように描かれているのであって、戦争そのものに対しての意識がはっきりと語られているわけではない。

## 第二章 Waugh は戦争に何を見たのか

The Trilogy から 1 冊本へと自ら改訂した際に *Sword of Honour* につけられた Preface で彼は、自著の目指したものについて次のように述べている。

‘I sought to give a description of the Second World War as it was seen and experienced by a single, uncharacteristic Englishman, and to show its effect on him’ (ix) . 主人公の Guy Crouchback が英国人としては典型的とはいえないというその意味、その彼が大戦で何を体験してどう考えたか、そして大戦が彼にどんな影響を与えたかという、つまりは Guy Crouchback の物語を供する、ということだろう。

ここでは主人公の心の動きと、彼を取り巻く状況の変化を追うことで、戦争に対する個人という、相対的かつ絶対的な関係を考えていきたい。

### Guy が Halberdiers に入隊するまで

主人公の Guy Crouchback は物語の始まる時 35 歳、8 年間にイタリアの片田舎で、ほとんど孤独のうちに過ごして来た英国人である。彼は、カトリックの信仰を守り抜いた誇り高い旧家の末裔で、幸せな結婚をしたはずが、8 年前に妻 Virginia がほかの男に心移しあっさり去っていったその痛手から立ち直れないまま、家族の別荘で引きこもりの人生を送っている。別荘は、‘It was a place of joy and love. It was the place of Guy’s happiest holidays with his brothers and sister’ (6) と描写されて、子ども時代の Guy の日々が幸せであったことも伝わってくる。彼は末っ子で、姉 Angela は国会議員と結婚し、二人の兄のうちひとりは大戦で戦死、ひとは狂死している。Guy は子どもの出来ないうちに離婚してしまい、宗教の定めるところにより、相手が生きている限りは新たに伴侶を持つことが出来ない。彼の父 Mr Crouchback (given name は Gervase で、これは Crouchback 家で代々長男が継ぐ名前である) は家系の途絶える覚悟を決めて、妻 (Guy にとっては母) も亡くなっていることでもあり、広大な屋敷を女子修道会に貸して、自分は海辺の小さなホテルでひっそり暮らしている。

妻に去られた後の 8 年に及ぶ孤独の日々、深い傷口を抱えて、神経のいささか繊細すぎる Guy は、心を閉ざして暮らしていた。彼が引きこもって暮らしているその土地で当然ながら、彼は周囲の人々との交わり持つこと

が出来なかった。

He was not loved, Guy knew, either by his household or in the town. He was accepted and respected but he was not *simpatico*. . . . Guy's uncle, Peregrine, a bore of international repute . . . was considered *molto simpatico*. . . . Guy, alone, whom they had known from infancy, who spoke their language and conformed to their religion, who was open-handed in all his dealings and scrupulously respectful of all their ways, whose grandfather built their school . . . Guy alone was a stranger among them. (11-12)

‘*simpatico*’が斜体になっているのは、彼のまわりの人々が使っているイタリア語をそのまま引用した体であり、‘not *simpatico*’は、気心が知れない、というほどの意味だろうか。周囲からそのように思われながら暮らしているのは、Guyの心の奥に、ある種の麻痺が起きているためだ、と語り手は説明する。‘Into that wasteland where his soul languished he need not, could not, enter. He had no words to describe it. There were no words in any language. There was nothing to describe, merely a void. . . . It was as though eight years back he had suffered a tiny stroke of paralysis; all his spiritual faculties were just perceptively impaired’ (10). 教会で告解をする時にさえ、Guyは自分の魂の深い部分をことばにすることが出来なかった。ことばを持っていなかった、と言うよりそこには空虚しかなかった、というくらい、Guyの負った心の傷は深かったし、もともとが傷つきやすい心の持ち主だったのだろう。

そのGuyが1939年の夏の朝、新聞の見出しが独ソ不可侵条約の締結を告げているのを見て、物語が動き始める。‘News that shook the politicians and young poets of a dozen capital cities brought deep peace to one English heart. Eight years of shame and loneliness were ended’ (7). 世界を震撼させたこのニュースは、一人の英国人の心には深い平安を与えたのだ。それま



でも Guy は、ドイツのナチスが狂っており間違っていることは知っていたし、もはや戦争が避けがたいことも分かっていたし、自分の故国がどさくさの中で参戦することも予期していたが、基本的に無関心であった。しかし新聞を見た Guy の様子は次のように、自由間接話法で描写されて、Guy の心に強い変化が生じたことを示唆する。‘But now, splendidly, everything had become clear. The enemy at last was plain in view, huge and hateful, all disguise cast off. It was the Modern Age in arms. Whatever the outcome there was a place for him in that battle’ (7). 今や敵はついにその偽装を捨て、憎むべき姿をあらわした。Guy はこの戦争に大義があると信じ、その戦いの中に、自分の居場所もあるはずだ、と確信する。‘Whatever the outcome there was a place for him in that battle’ という一言は、戦闘の中に自分も居場所を見つけられるだろう、というよりはむしろ、これまでどこにも見つけられずにいた自分の居場所を、この戦闘の中に見つけることが出来るかもしれないという、自らの孤独に気がついた Guy の思いなのではないだろうか。

ところで、これまで描写されていた Guy の心の在りようから、新聞を読んで直ちに故国に戻って軍隊勤務に就くべく行動を開始しようとする彼の様子には違和感を覚えないでもないが、それほどまでに Guy の心の空洞は深く、無意識のうちにそれが埋められるのを待ち望んでいたと考えれば自然かもしれない。また、妻に去られた傷心が、大義あるはずの戦争への従軍によって埋められるとしたら、前章で触れた *Brideshead Revisited* における夫婦間の亀裂と軍隊への絶望感の関係の譬えがここにおいても平仄が合うという気もする。しかし *Brideshead Revisited* においては、ほとんど痴話げんかのような夫婦間の亀裂と同等扱いされているのが厭戦気分であるとき、*Sword of Honour* の Guy の心の傷の深さは、これから考察するように、戦争そのものに、延いては生そのものに対する絶望感と等価であるように考えられる。

故国に戻ってロンドンで軍隊の職探しに奔走する Guy であるが、年齢が邪魔をして、一向にはかばかしい返事を得られない。ところが気分転換に訪れた Mr Crouchback の隠居先のホテルで、父に紹介された Major Tickeridge が、‘If you *are* serious, why don’t you join us?’ (43) と、旅団 Halberdiers への入団の労を取ろうと申し出たことで、Guy の困却は一挙に解決される。この Halberdiers は、昔からの伝統がありながら独自の気風を持ち、Guy には願ったり叶ったりの所属先である。彼はこれ以降、この Halberdiers の戦士として戦争を体験していくこととなる。

ここで語り手は、イタリアでほとんど隠者のような生活を送っていた Guy が、少しずつ心を開き、世間に溶け込んでいく様子を、‘Here’s how’ という健康を祈念して乾杯する際の決り文句を定点として Guy の反応の仕方の変化を描写する。

‘Here’s how,’ said the major.

‘Here’s how,’ said the mousey wife.

‘Here’s how,’ said Mr Crouchback with complete serenity.

But Guy could only manage an embarrassed grunt. (41–42)

その晩の寝床の中の彼の思いは次のように語られる。‘His last thought before falling asleep was the uneasy question: “Why I couldn’t say ‘Here’s how’ to Major Tickeridge? My father did. . . Why couldn’t I?”’ (45) . くよくよと悩むのだが章が改まると、入隊した Guy が自分と同じ年頃の Aphorpe と出会って意気投合、乾杯する様子が描写される。章ははじめの 1 行が “‘Here’s how,’ said Guy’ (46) で始まるのである。そして次に、その年のクリスマス休暇にロンドンに滞在する Guy の様子も、‘Here’s how’ を巡って、‘Guy was changed’ (92) と描写されている。

当然のことながら、Guy の高揚感は長くは続かない。しかし、高揚感が

目覚ましいものであっただけに、心は開かれていく。もともと豊かだった感受性が蘇るのだ。語り手は、Guy と軍隊との関係について、‘(After some days) came domestic routine, much loyalty and affection, many good things shared, but intervening and overlaying them all the multitudinous, sad little discoveries of marriage, familiarity, annoyance, imperfections noted, discord’ (92) と、またもや結婚生活を引き合いに出して語っている。

### 一戦士としての Guy Crouchback

あまりにも素朴で純粋な正義感を持ち合わせてしまった Guy であるが、軍務に携わる中で理想と現実の食い違いが結婚生活のそれになぞらえて語られているうちは、軍隊、延いては戦争と Guy との間の亀裂はまだ決定的ではないと言える。

Guy は、上層部の命令ひとつで移動したり配属が変わったりしながら、戦闘の中に身を置いて月日を送る。スコットランド、アフリカの西海岸、地中海、情勢も知らされず行き先も定かでないまま移動することもあれば、停泊する船中に何週間もとどまっていることもあった。戦闘もあれば訓練もある。一方、Halberdiers に加わってまだ日も浅い頃、Guy は偶然に導かれてかつての妻 Virginia と再会する。彼女については物語のはじめの方で、‘not a Catholic but a bright, fashionable girl, quite unlike anyone that his friends or family would have expected’ (15) と描写されている。再会した彼女は往時と変わらない魅力を放っていたが、会ったことで、はっきりとは書かれていないけれども、長い歳月の Guy の懊悩は和らいだらしい。

ソヴィエトがフィンランドに侵攻して連合国側、とりわけ英国が裏切りに近いかたちで、みすみすフィンランドを敗北するにまかせてしまったことが明らかになった際に Guy を襲った疑念は、次のように語られる。‘No one . . . seemed much put out by the disaster. For Guy the news quickened the sickening suspicion he had tried to ignore, had succeeded in ignoring more often than not in his service in the Halberdiers; that he was engaged in

a war in which courage and a just cause were quite irrelevant to the issue' (169). Guy の裡でこれまでも頭をもたげることのあった疑い、勤務に紛らせてなんとか無視してきた気分の悪くなるような疑い、即ち彼は、勇気や大義といったものが、実のところはその核心ではありえない戦争に従事しているのではないか、という疑い。そしてそのことを周りでは誰も気にかけている様子がない、となれば、Guy の苦悩の深さも分かろうというものである。語り手にはもう、結婚生活の比喩を持ち出す余裕はない。

### 父 Mr Crouchback の死

1943 年の秋の初めに休暇をとって Mr Crouchback を訪ねた Guy は、枢軸国側のイタリアが降伏したことをまずは歓迎し、父と次のような会話を交わす。

'I don't think I'm interested in victory now,' said Guy.

'Then you've no business to be a soldier.'

'Oh, I want to stay in the war. I should like to do some fighting. But it doesn't seem to matter now who wins.' (610)

戦争と、個人としての Guy の間に齟齬が見え隠れし始めているのを父は見抜いている。

このあとで Guy が受け取った手紙の中で父は次のように書く。

When you spoke of the Lateran Treaty did you consider how many souls may have been reconciled and have died at peace as the result of it? How many children may have been brought in the faith who might have lived in ignorance? But quantitative judgements don't apply. If only one soul was saved, that is full compensation for any amount of loss of 'face.' (612)

ラテラン条約は多くの魂を救済したが、しかし量で判断するのは適切ではなく、どれほど面目を失うことになってもたったひとつの魂でも救われるならば、それが充分な報いとなる、という父のことは、以後の Guy の生きる指針となる。

ほどなく Mr Crouchback は急逝する。父を思慕する Guy にとっては、‘the best man, the only entirely good man, he had ever known’ (674) である Mr Crouchback は全編を通して、語り手がほとんど手放して評価する登場人物であるが、特定できるモデルがあるとは考えにくい。作家が自分の思いと経験をすべて反映させて、想像で造形した理想の人物なのではないだろうか。

葬儀の間も、父の手紙は、絶えず Guy の心に蘇る。‘He did not expect a heroic destiny. Quantitative judgements did not apply. All that mattered was to recognize the chance when it offered. Perhaps his father was at that moment clearing the way for him. “Show me what to do and help me to do it,” he prayed’ (677) . Guy は祈り続ける。ミサが終わって葬列が墓地に向かう。棺に付き随う Guy の胸中を去来する思いは、三人称の語り手ならではの視点の移動にもかかわらず、不思議な静けさをたたえて語られる。

It was a still day; the trees were dropping their leaves in ones and twos; they twisted and faltered in the descent as their crumpled brown shapes directed, but landed under the boughs on which they had once budded. Guy . . . remembered boisterous November days when he and his mother had tried to catch leaves in the avenue; each one caught ensured a happy day? week? month? which? in his wholly happy childhood. Only his father had remained to watch the transformation of that merry little boy into the lonely captain of Halberdiers who followed the coffin. (677-78)

両親に愛されて、ただただ幸せだったことも時代から戦場まで Guy の中で

時間は続いており、同じレールの上を移動している。それは多分、母との思い出は実際に経験されたことであって、戦場の現実とその意味で、対照的でありながらつながるからだろう。

Guy の祈りはやがて聞き届けられる。自棄の火遊びから妊娠してしまった Virginia が、堕胎の引き受け手も見つからず困り果てて、たまたま負傷して叔父の許で療養していた Guy を、最後の頼みの綱として訪ねて来る。彼は率直に窮状を訴えた Virginia を、周囲の大反対の嵐を押し切ってふたたび妻にする。Virginia のこどもの父親が、人もあろうに Guy が忌み嫌っていた Halberdiers の下士官 Trimmer であることも承知の上である。結婚に反対する親しい知り合いの Kirstie と Guy の間で次のような押し問答がある。

‘The world is full of unwanted children. . . . What is one child more or less in all that misery?’

‘I can’t do anything about all those others. This is just one case where I can help. And only I, really. I was Virginia’s last resort. So I couldn’t do anything else. Don’t you see?’

‘Of course I don’t. . . . You’re insane.’ (785–86)

量の多寡が問題なのではない、ひとつの魂でも救われれば、という父から Guy に伝わった祈りがひとつ、形になった。偶然の悪戯のような再婚によって、Guy の魂もまた救われた。のちになって以下のように、穏やかな日々が回想されている。‘Without passion or sentiment but in a friendly, cosy way they had resumed the pleasures of marriage and in the weeks while his knee mended the deep old wound in Guy’s heart and pride healed also, as perhaps Virginia had intuitively known that it might do’ (841) .

Guy が軍務に復帰した後、Virginia は男の子を出産、彼は Gervase と命名される。空襲の激しくなったロンドンを心配して Angela は疎開をすすめるが、Virginia はロンドンにとどまることを選び、空襲で亡くなる。Angela

に引き取られた Gervase は、無事に成長していく。Virginia の死去の報せが Guy に大きな動揺を与えることはなかった。

### 物語の最後は

隊に復帰した Guy は最後の任地に向かい、物語も終わりに近づく。Guy の任務は連絡将校として旧ユーゴスラヴィアのクロアチアで、パルチザンを相手に情報を収集することである。あやしげな英語を話す通訳はどうやら秘密警察の手先で、Guy を監視するのが役目らしい。そのような中で彼は、餓死しかけている 108 人のユダヤ人難民の訪問を受ける。イタリアに帰りたいので援助してほしいという彼らの願いを聞き届けるために Guy は、パルチザン相手に奔走することになる。難民代表として Guy との交渉にあたった知的で冷静な Mme Kanyi と交わした会話を Guy は、生涯忘れることはないだろう。

短いエピローグの前の、最後の章 ‘The Last Battle’ について Martin Stannard は、これだけの大作をどのように終わらせるか、Waugh には考えがあった、とその著 *Evelyn Waugh: The Later Years 1939–1966* に、かなりの紙幅を割いて述べている。それは、*Unconditional Surrender* が *Sword of Honour* の第三部として書かれた際に、Waugh 自身が 1949 年に雑誌に掲載した短編小説 ‘Compassion’ を終りの部分に組み込むという大胆な試みである。Stannard が語るその経緯と評価の部分を以下に引用する。

No one remembered that short story, ‘Compassion’, published twelve years earlier. Waugh had embarked on his complex three-decker with the idea of fleshing out Major Gordon’s history. . . The tale’s conclusion is rewritten to heighten tension and Crouchback’s sense of helplessness; small pieces are reshaped; but the dialogue remains largely intact. . . From the outset, it seems, and certainly from the inception of Volume Two, he knew exactly where his saga would finish, what shape his short story would give to the whole, and he would not allow ‘Compassion’ to

be republished for precisely this reason. (441-2)

かつて書き上げて世に出た作品の再版を止めておいて、その内容を The Trilogy の最終巻である *Unconditioned Surrender* の掉尾に使おうというのであるから、作品 ‘Compassion’ とそこに描かれた内容に Waugh は特別な思い入れと感慨を抱いていたことであろう。緊張感と、Crouchback が抱く無力感を高めるべく、結論は書き直されたが、二つの作品を並べて読んでも、Crouchback が ‘Compassion’ では Major Gordon であったこと以外、途中までは異同がほとんど見当たらない。ただ、Mme Kanyi が Guy に向かって次のように心中を吐露して不条理を問いかけ、Guy がそれを認めた部分は、*Unconditional Surrender* ではじめて書かれたものである。

‘Is there any place that is free from evil? It is too simple to say that only the Nazis wanted war. These communists wanted it too. It was the only way in which they could come to power. Many of my people wanted it, to be revenged on the Germans, to hasten the creation of the national state. It seems to me there was a will to war, a death wish, everywhere. Even good men thought their private honour would be satisfied by war. They could assert their manhood by killing and being killed, They would accept hardships in recompense for having been selfish and lazy. Danger justified privilege. I knew Italians — not very many perhaps — who felt this. Were there none in England?’

‘God forgive me,’ said Guy. ‘I was one of them’ (887)

この一節には、この作品の全体が凝縮されているように思われる。Mme Kanyi に、罪悪のない場所があるでしょうか、戦争を望んだのはナチスもパルチザンも同じだし、ドイツに報復するために、わたしの同胞もそれを望みました、戦争への意志、死への願望が至るところにあるように思われます。善き人々でさえ、自分たちの個人的な名誉が戦争によって満たされると考えました。多くではありませんが、そんなふうに思っていたイタリ



ア人を知っています。イングランドにはそういう人はいなかったのでしょうか、と問いかけられ、Guy は、わたしもそのひとりでした、と認識する。

Guy が別の土地へ転任しているしばらくの間に、彼の奔走が実ってユダヤ人たちはイタリアへ帰ることが出来たが、Guy の目を覚ましてくれた精神の恩人とも言うべき Mme Kanyi は、Guy と個人的に話をしていたことを見咎められ、人民裁判で、敵と情を通じた廉で処刑されてしまう。

帰国直前に Guy はこれを知る。衝撃の大きさは言うまでもない。次の日に泊まった宿の主人に、‘For a chap who’s on his way home you don’t seem very cheerful’ (892) と言われたことを語り手が告げて ‘The Last Battle’ の章が終わる。

数ページだけの最後の章 ‘Unconditional Surrender’ では、1951 年の 6 月のある晩のあるパーティの場面が描写される。この章には、もちろん Guy も登場するが、視点人物は Guy の姉 Angela の夫 Box-Bender である。Box-Bender とその友人の会話から、Angela の親しい友人の娘と結婚している Guy の現在が分かるし、穏やかで人付き合いも良くなった Guy のことばの端々から、今の落ち着いた生活も垣間見える。ただ、Guy は前面には出てこないから、心のうちは描かれていないけれども。

### 第三章 ‘unconditional surrender’ の意味するもの

10 年をかけて出版された *Sword of Honour* の最終巻 (第三部) は *Unconditional Surrender* のタイトルを戴いていて、そのごく短い最終章は ‘Epilogue: Festival of Britain’ となっていた。それが改訂されて一冊本になると、最終章のタイトルが ‘Unconditional Surrender’ となって、‘Festival of Britain’ のほうはどこかへ消えてしまった。もし Festival of Britain を残すと、今度は逆に、Unconditional Surrender のタイトルがなくなってしまう。著者は ‘unconditional surrender’ という、言わば負の状況に対して特別の思いを抱いているように思われるので、このタイトルを残したかったことであろう。何が何に対して無条件降伏をしたのか。主人公の Guy Crouchback

にとって無条件降伏とは何を意味するのか、何がその思いを抱かせたのか、ここではそれを考えたい。

第二次世界大戦では連合国側が勝利しており、Guy の故国である英国はその一翼を担っているから、戦争あるいは戦闘の結果と直接の関係があるとは考えにくい。

端的に言えば、戦争そのものに対する敗北感ではないか。もし個々の戦争に大義があったとしても、その圧倒的な力の渦に対しては個人は存在していないのも同じだという虚無感を、Guy は無条件降伏と受け止めたのだろう。戦争は、人間が個人であることを許さないと認識するに至ったのである。

Mr Crouchback の手紙の一節、Guy が常に心の中で繰り返していた ‘Quantitative judgements don’t apply. If only one soul was saved that is full compensation for any amount of loss of face’ に照らしても、100 人からのユダヤ人を救っても Mme Kanyi その人を助けられなかった痛恨の思いが一生 Guy を苛むであろうことは想像に難くない。個人は戦争の前には何ほどのものでもなくなってしまうのか、という憤りにも似た思いがあったはずだ。その意味でこの章を ‘Unconditional Surrender’ として、ここで作品を終わりにすることも考えられたはずだが、むしろ一個人としてひっそりと市井に生きる Guy の姿を描くことで逆に、すべての個人にとって、戦争の中には個人の居場所などありえない、ということが示されたのではないだろうか。 *The Ordeal of Gilbert Pinfold* にさりげなく置かれた一文 ‘Since the end of the war, his life had been strictly private’ の持つ重みが、ここに来て理解されるように思われるのである。

著者が自作の改訂版を世に問うたのは、その ‘Preface’ で述べている通り、繰り返しや食い違いを取り除いて筋の展開を追いややすく、ひとつの物語として読まれるようにすることが主な目的であっただろうが、結末部分の、章タイトルを含むこの構成によって、unconditional surrender を際立たせる意図も理由のひとつであったのではないだろうか。

おわりに

Waugh は、Hastings や Eade の伝記によれば、*Unconditional Surrender* の執筆中、収入としてはもっと割がよい上に書くのに手間の掛からないノンフィクションの依頼を断って、小説としての *Unconditional Surrender* の執筆に没頭した。Eade が ‘his artistic vocation to fulfill’ という通り、芸術家としてまた小説家としての使命を果たす、ということであろうし、経験に形を与えそれを人に伝える、ということでもある。

この作品の場合は、もう少し違う言い方をすることも出来るかもしれない。はじめに引いた Cyril Connolly の書評には、Waugh がこの作品の執筆に至った経緯についての作家のことが引用されている。‘In 1950 I wrote of “Officers and Gentlemen”, “I thought at first the story would run into three volumes. I find that two will do the trick.” This was not quite candid. I knew that a third volume was needed’ (430) . 第三巻が必要だと分かっていた、とどういう意味で言っているのだろうか。作者として Waugh は、主人公の Guy を宙吊りにしたままで放っておくことが出来なかったのではないだろうか。

作家は主人公の生年月日を、自分のものと一日違いに設定している。これは、主人公と自分は同一人物ではない、混同してくれるな、と宣告しているともとれるし、同じ時代に同じ空気を吸って同じ経験をした者同士として親近感を寄せているようでもある。とにかくそういう主人公を失意の中に置き去りにするわけにはいかなかったはずだ。

また、経験は伝えるばかりではなく、「残す」ことも使命だろう。1991年に始まった旧ユーゴスラビアをめぐる紛争を現地で経験している詩人の山崎佳代子は、毎日新聞のインタビューで次のように語っている。「私が一番信用しているのは自分の記憶です。書くことによって残されるという素朴なことが分かりました。つまり、書いていなかったら事実としてなかったことになる」(2022/11/7 毎日新聞夕刊)。同じ記事の中で次のような発言もしている。「広島や長崎の原爆、ベトナム戦争もそうですが、一度傷つ

いた人は、その傷を一生背負うんです。そういった人たちのその後の生き方を、誰かがすくい上げ、耳を傾けなければならない。それを誰がやるのかというと、詩や文学に携わる者たちなんだと思います」(同上)。山崎は、経験や事実、ここでは傷ついた人たちの傷や思いに形を与えて残すのは文学者(芸術家)の使命だと考えているのだろう。

ただ、Waugh のこの作品には「反戦」を訴えかける気配など更になく、現実の戦争が文学に昇華されて供されるだけである。精神科医の斎藤環が新聞のインタビューで、芸術や哲学といった文化は人間の価値観をつくり上げるものだと主張して、次のように述べている。「いかなる時も、個人の『自由』『権利』『尊厳』が優先されるべきです。つまり、文化の目的とは個人主義の擁護ということになります。そのため、文化を洗練させることが、戦争の抑止につながっていくはずですよ」(2022/8/4 毎日新聞夕刊)。文学であればこそ、人の心に届くのだし、結果として戦争の抑止へとつながっていく、という主張である。これはまた、吉田健一が1957年4月19日付朝日新聞のコラムに書いた次の一節を思い出させる。「戦争に反対するもつとも有効な方法が、過去の戦争のひどさを強調し、二度とふたたび・・・と宣伝することであるとはどうしても思えない。戦災を受けた場所も、やはり人間がこれからも住む所であり、その場所も、そこに住む人たちも、見せ物ではない。古きずは消えなければならないのである。／戦争に反対する唯一の手段は、各自の生活を美しくして、それに執着することである」(このコラムは後に他の短文と『作法無作法』に収録出版された。112)。吉田も声高に反戦を訴えてはいないけれども、Waugh は戦争に反対するわけではさえない。結果として反戦の表明になり得たかもしれないが、此处では戦争に対する深い絶望が披露されるだけである。

Selina Hastings は、Waugh のこの絶望を次のように分析している。‘*Unconditional Surrender* strongly conveys Waugh’s own feelings of sadness and resignation, his consciousness of having failed in the heroic destiny he had originally hoped to find in the war, his disillusionment in the war itself’

(595) . ‘heroic destiny’ どころか、完膚なきまでに個人の存在が抹殺されてしまう戦争においてはむしろ、‘quantitative judgement’ がすべてであることを、戦争を経験して Waugh は、多分 Guy 以上に知ってしまったのである。

引用文献

- Amoy, Mark ed. *The Letters of Evelyn Waugh*. 1980. London: Phoenix, 2009.
- Eade, Philip. *Evelyn Waugh: A Life Revisited*. New York: Henry Holt and Company, 2016.
- Hastings, Selina. *Evelyn Waugh: A Biography*. London: Sinclair-Stevenson, 1994.
- Stannard, Martin. *Evelyn Waugh: The Later Years 1939–1966*. New York: Norton. 1994.
- . ed. *Evelyn Waugh: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1984.
- Waugh, Evelyn. *Brideshead Revisited*. 1945. Revised edition 1960. London: Penguin, 1962.
- . *The Complete Short Stories*. London: Penguin. 2011.
- . ‘Compassion’. 1949. *The Complete Stories of Evelyn Waugh*. New York: Little. 2000.
- . *Ninety-Two Days*. 1934. London: Serif, 2007.
- . *The Ordeal of Gilbert Pinfold*. 1957. London: Penguin, 2006.
- . *Sword of Honour*. 1965. London: Penguin. 2011.
- . *The Sword of Honour Trilogy*. 1961. New York: Everyman’s Library. 1994.
- 吉田健一「長崎」『作法無作法』宝文館 1958.

